

第 8 期（2023 年度）事業報告

1. 理事会履歴

決議事項

2023 年 12 月 20 日臨時理事会にて、役員人事について以下の日本皮膚免疫アレルギー学会より推薦いただいた理事 1 名を追加する提案があり、承認されました。また続いて 2024 年 1 月 16 日に臨時社員総会を開催し、理事就任について承認を得ております。

室田浩之 先生（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚病態学教授）

報告事項

・ 毎月次事業報告

月末の定例会の時期に合わせて、事務局より月次報告書をメール配信し、毎月報告致しました。

その他、News Letter にて四半期毎に財務面を含めた運営状況を報告し、必要な情報の共有化を行いました。

2. 協力医師よりの症例登録

・ 2023 年度総数 389 件：アレルギー性 353 件、非アレルギー性 36 件

（2022 年度総数 425 件：アレルギー性 391 件、非アレルギー性 34 件）

各年の 4 月 1 日～翌年 3 月 31 日に登録された症例状況の集計結果です。

症例登録をいただく医療施設には、特定臨床研究（特定臨床研究「化粧品等のアレルギー確認方法確立に関する研究」（実施計画番号 jRCTs041180105）に参加いただいております。

3. 賛助会員企業の募集

・ 新規入会 0 社 （退会 1 社）

2023 年度会員 賛助会員企業数=115 社（変化なし）、会費口数=155 口（変化なし）

* 参考：第 7 期 賛助会員企業数=116 社、会費口数=156 口

賛助会員企業数の変遷

		第4期	第5期	第6期	第7期	第8期
		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
年初	賛助会員数	103	113	112	112	115
	口数	142	152	151	151	155
最終	賛助会員数	115	116	113	116	115
	口数	155	155	152	156	155

・問い合わせに対してオンライン説明会を実施しましたが、入会はありませんでした。

・広報活動

広告の掲載

- ✓ 第48回日本化粧品学会要旨集に後付け1/2頁の広告を掲載しました。

学会発表・雑誌掲載・講演会

✓ 学会発表

SSCI-Net 登録データの提供や成分提供の仲介等を行った皮膚科医の先生方に、共同演者に加えていただき、SSCI-Net の活動を紹介していただきました。

以下以外でも、臨床報告の研究発表にて、SSCI-Net の仲介により成分提供に至ったことを演題内でご紹介いただいた報告がありました。

- 第53回日本皮膚免疫アレルギー学会、鈴木加余子（藤田医科大学ばんだね病院総合アレルギー科）ら：「接触皮膚炎の原因診断におけるパッチテストの有用性」
- 第53回日本皮膚免疫アレルギー学会、飯島 茂子（はなみずきクリニック）ら：「湿布薬・絆創膏に含有されるロジン関連化合物によるアレルギー性接触皮膚炎の5例」
- 第53回日本皮膚免疫アレルギー学会、欠田 成人（済生会松阪総合病院）ら：「放射線照射野のマーキングに用いた市販の油性マーカーペンによる接触皮膚炎症候群の1例」

✓ 論文掲載

成分提供の仲介等を行った皮膚科医の先生方に、共著者に加えていただきました。

- 欠田正人（済生会松阪総合病院）ら、ダーマボンド®アドバンスドの2-オクチルシアノアクリレートによる接触皮膚炎症候群の1例、臨床皮膚科、78(2)、2024

松永理事長が第47回日本化粧品学会 特別講演の内容をまとめて投稿いただきました。

- 化粧品による皮膚障害のリスク低減と原因究明のためのSSCI-Netと関連研究、日本化粧品学会誌、47(2)、97-107、2023

✓ 講演会

- 日本産業皮膚衛生協会研修会にて、矢上理事より講演していただきました。
「化粧品や日用品によるアレルギー～皮膚障害事例の診療の実際やそれらの事例を最小化する取り組み（一般社団法人 SSCI-Net） について～」(2024 年 10 月 24 日)
- 第 6 回関西化粧品安全性研究会にて、SSCI-Net の紹介時間をいただき、杉山が講演致しました。(2023 年 9 月 22 日)
- 藤田医科大学医学部・アレルギー疾患対策医療学講座終了研究報告会・記念講演会にて、杉山が講演致しました。「一般社団法人 SSCI-Net の仕組みと活動について」(2024 年 2 月 22 日)。
- 日本化粧品工業会 2023 年度「化粧品安全性評価セミナー（初級）(実践入門)にて、SSCI-Net の紹介と成分パッチテストの推進について従来通り案内していただきました。(2023 年 6 月、10 月)

4. 業務改善実績

・システム修正について

昨年度再構築したデータベースの医師登録サイトに以下の改修を行いました。

- 1) アレルギー性症例登録サイトの「関連する陽性アレルゲン」および「陽性成分」欄に入力された成分情報のコピー機能の追加
- 2) JBS 結果登録サイトの最終診断名登録（金属アレルギー）に関する選択項目名の修正
- 3) 医療施設所在地の都道府県名および分類の選択にドロップダウンリストの追加等

・化粧品学会との連携

これまで、成分パッチテストを実施するに際し、試料調製条件の検討が必要な場合は、藤田医科大学アレルギー疾患対策医療学講座に依頼しておりましたが、2024 年 3 月で講座が終了するため、協力いただける第三者機関が必要となります。そこで、2022 年度より矢上理事に日本化粧品学会と調整していただき、化粧品学会に成分パッチテストの試料調製条件を検討する組織が設置され、2024 年 4 月より活動できる体制が整いました。

5. 情報発信活動

・News Letter の発行

毎月 10 日（土日や休日の場合はその翌日）に発行し、延べ 12 回に亘り時宜に即し

た情報を関係者へ配信致しました。

臨床医によるコラムは、毎回好評で、化粧品等の製造販売企業においては、リアルな皮膚障害状況がわかるので楽しみにしているとの声が寄せられています。一方、理事の先生方への負担が大きいため理事以外の皮膚科医への依頼や医師向けの化粧品の成分や業界の現状を案内する記事も配信するよう心がけております。

シリーズ「SSCI-Net 症例登録から抽出された課題と取り組み」の原稿ご担当

松永理事長 2 回、矢上理事 3 回、鈴木理事 2 回

理事以外への依頼：

「防腐成分について考えてみる」大河正樹 先生（大河微生物研究所）

「SSCI-Net に期待すること」堀田琴美 先生（株式会社池田模範堂）

・特定成分に関する皮膚障害症例発生件数の問合せ

賛助会員企業からの特定成分による陽性症例数の問合せに対し、2016 年度より賛助会員へのサービスの一環として、蓄積している陽性症例の概要情報を提供しております。本年度は、40 企業より 96 成分の問い合わせがありました（2022 年度：41 企業、111 成分、2021 年度：32 企業、72 成分）。過去 3 年間の問い合わせ状況はほぼ同程度であることから、この情報の有用性が一部の企業では認知されたことを示していると思われます。今後も被疑製品の原因精査に協力し、情報の充実に努めたいと思っております。

6. 産学官連携活動

・化粧品等のアレルギー情報共有化推進連絡会

第 21 回および第 22 回連絡会をいずれもオンライン会議形式で開催致しました。

1) 第 21 回連絡会

2023 年 6 月 21 日に開催し、43 名（SSCI-Net 理事を含む）にご参加いただきました。SSCI-Net より、2022 年度登録症例の概要（中間報告）について化粧品、医薬品および家庭用品等の概要およびトピックを松永理事長および矢上理事、鈴木理事より報告した後に、演題名「家庭用品等に含まれる感作性物質の実態調査－金属溶出について－」について、河上 強志先生（国立医薬品食品衛生研究所 生活衛生化学部第四室 室長）より情報を共有していただきました。

2) 第 22 回連絡会

2023 年 12 月 20 日に開催し、43 名（SSC-Net 理事を含む）にご参加いただきました。SSCI-Net より、2022 年度登録状況の最終的な数字をご案内し、化粧品、医薬品および家庭用品等について概要およびトピックを松永理事長および矢上理事、鈴木理事より報告致しました。その後、佐々木 和実先生（独立行政法人製品評価技術基盤機構 技監）より演題名「NITE の皮膚炎関係の実績について」に

ついて、情報提供していただきました。

・厚生労働省家庭用品に係る症例情報の提供（受託事業）

家庭用品に係る症例の登録製品について、毎月 14 日までに厚労省化学物質安全対策室に報告致しました。2023 年度は、2023 年 10 月～2024 年 1 月の 4 ヶ月に渡り登録のない期間が続き、家庭用品による皮膚障害症例をデータベースに登録いただくことにより厚労省に報告できることをニュースレターにて繰り返し広報致しました。なお、2022 年度に関しては、以下に「2022 年度 家庭用品に係る健康被害の年次とりまとめ報告」が以下の URL にて公開されています。

<https://www.mhlw.go.jp/content/11124000/001178705.pdf>

「2022 年度 家庭用品に係る健康被害の年次とりまとめ報告」の「表 1-1」で示すように、家庭用品による皮膚障害症例の報告総数および内訳としてピアスやネックレス等の金属製品による皮膚障害症例が減少しておりました。実際に皮膚障害を起こす患者さまが減っているのであれば問題はないのですが、日本皮膚免疫アレルギー学会接触皮膚炎研究班の調査([jsa2015_230804.pdf \(jscia.org\)](#))においてもニッケル等の金属の陽性率は下がっていないことから、アクセサリー等によるアレルギー性接触皮膚炎を起こされている患者さまは減っていないと推測しています。そこで、症例を登録しやすい環境づくりのために、アクセサリーなどの金属製品のニッケル含有の有無を確認できるニッケルスロットテスター

(SmartPractice 社製) を配布することを 2024 年 2 月のニュースレターで広報致しました。その後多くの医療施設よりご希望をいただき、3 月末までに 12 施設に送付致しました。

表 1-1 家庭用品による皮膚障害の報告件数

(参考) 2021 年度		2022 年度	
家庭用品	件数	家庭用品	件数
ピアス	13	家庭用手袋（ゴム） ^{※1}	4
除菌剤（手指）	12	家庭用手袋（非ゴム）	3
ネックレス	10	ネックレス	3
ビューラー	8	ウェットスーツ ^{※2}	3
マスク	5	ピアス	2
腕時計	5	エクステ用接着剤	2
食器用洗剤	4	ビューラー	1
眼鏡	2	食器用洗剤	1
下着	2	下着	1
美容機器	2	イヤホン用イヤピース	1
靴	1	楽器	1
家庭用手袋（天然ゴム）	1	アクセサリー（非金属）	1
家庭用手袋（その他）	1	携帯ストラップ首掛け	1
ダイエット器具	1	ゴルフ手袋	1
ベルト	1	総数	25
歩数計	1		
ゴルフグリップ	1		
イヤホン用イヤピース	1		
楽器	1		
サンダル	1		
冷却ジェルシート	1		
総数	74		

^{※1} 天然ゴム 2 件、合成ゴム 1 件、不詳 1 件

^{※2} 1 事例

7. 学術活動

- ・ SSCI-Net で収集された症例情報等の研究成果の関係学会発表および雑誌投稿
 - ✓ 学会発表
 - 第 48 回日本化粧品学会、松永佳世子（一般社団法人 SSCI-Net、藤田医科大学・医・アレルギー疾患対策医療学）ら：「SSCI-Net 情報から見えてきた化粧品の皮膚安全性(2023)」
 - 第 53 回日本皮膚免疫アレルギー学会、松永佳世子（一般社団法人 SSCI-Net、藤田医科大学・医・アレルギー疾患対策医療学）ら：「SSCI-Net 2022 年度アレルギー性皮膚障害例のまとめ」
 - 第 53 回日本皮膚免疫アレルギー、鷲尾 健（日本接触皮膚炎研究班、神戸市立西神戸医療センター）、接触皮膚炎研究班：「Japanese baseline series (JBS) 2015 の 2022 年度陽性率」
 - ✓ 雑誌投稿
 - Iijima S. et al, Analysis of patch testing with cocamidopropyl betaine and its impurities in patients with intractable scalp dermatitis in a single clinic in Japan, *Contact Dermatitis*, 89:368–373, 2023
 - 矢上晶子（藤田医科大学ばんだね病院総合アレルギー科）、ジェルネイルによるアレルギー性接触皮膚炎事例について、*日本化粧品学会誌*、47(3)、190–196、2023

8. 臨床支援活動

皮膚科医からの、アレルギー性接触皮膚炎の原因成分精査のための仲介依頼が増えています。SSCI-Net の認知性が高まっていることを感じます。皮膚科医の先生方にとって、患者さまのアレルギー性接触皮膚炎の原因成分を特定することによって QOL 改善を目指すという観点で必要であるだけでなく、アレルギーを減らすことにつながると考えております。原因成分を特定いただければ、賛助会員企業への情報提供を通じ、安全な製品開発につなげることができます。このような側面も含めて、積極的に原因成分を特定すべく臨床支援を推進してまいります。賛助会員企業には、成分パッチテスト実施のための原料提供には、積極的に協力をいただいております。また、家庭用品や医療機器などの分析を含めた相談も増えており、製品評価技術基盤機構や国立医薬品食品衛生研究所と連携を密にして進めております。

仲介実績（2024年3月13日調べ）

対応開始時期	依頼数	成分提供了承	提供不可	分析依頼
2019	30	24	6	0
2020	30	17	3	3
2021	31	27	1	3
2022	46	25	8	8
2023	69	48	13	5

9. SSCI-Net 関係者内に限定した医療施設紹介

本年度は、3例の紹介打診はありましたが、医療施設の紹介に至った事例はありませんでした。患者さまが成分パッチテストを希望されて医療施設の紹介を打診された事例では、成分パッチテストについて患者さまに説明した後、負担が大きいとの理由で患者さまが辞退される場合があります。また、サロンを通じて製品を販売する業態においては、お客様の状況はサロンを通じて行われるので、お客様の正確な情報が把握できず、最終的に紹介依頼を断念されました。

企業より相談を受ける場合、患者さまの皮膚症状についてまず医師からのアドバイスを仰ぎたいという希望も多く、松永理事長に対応いただきました。賛助会員からの希望で患者を医療施設に紹介するのみでなく、賛助会員の相談に対して医学的な助言を行うことにもニーズがあることが確認されました。

10. 症例登録促進活動

SSCI-Netの活動として、「臨床医による皮膚健康障害症例報告の収集」を第一に掲げていますが、症例登録は皮膚科医によるボランティアで支えられています。一般社団法人 SSCI-Net 発足時より、財政面が安定した後に謝礼や登録料をどうすべきか検討することが宿題となっていました。そこで、今年度は症例の登録料について会計事務所の綿谷先生に相談致しました。その結果、非営利型一般社団法人であることから、登録料として設定するよりも謝礼としての位置づけの方が望ましいとの意見をいただきました。また、謝礼であっても、金銭ではなく物品の方が良いとのご意見も受けて、先生方が臨床現場でお使いいただいているフィンチャンバーを、2022年度に症例登録およびJBS登録数が多かった最上位10医療施設に、1箱ずつお贈り致しました。

フィンチャンバー 50×5 チャンバーPP 1箱
<チャンバー>アルミニウム/ポリプロピレン (内径 8mm)

11. 役員人事

役員人事に関する調整

- ・一般社団法人日本皮膚免疫アレルギー学会加藤則人理事長（SSCI-Net 日本皮膚科

学会推薦理事)のご尽力により、副理事長の室田浩之先生を、当法人理事として、ご推薦をいただき、臨時理事会・臨時社員総会を経て理事1名の追加を承認いただきました。室田浩之先生にも当法人理事として就任いただけることを承諾いただきました。

SSCI-Netの活動の原点は、日本皮膚免疫アレルギー学会の前身である、日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会パッチテスト試薬共同研究委員会が2010年4月より学会員全員に、アレルギー性接触皮膚炎の原因製品のアンケート調査をおこなった研究であったことから、松永理事長、籠橋前事務局長が2016年の設立当初より調整されていましたが、8年を経て理事を推薦いただく形で日本皮膚免疫アレルギー学会と繋がることができました。

- 本定時社員総会が、理事の任期2年および監事の任期4年の満了の年にあたるため、理事(9名)および監事に継続依頼を行った結果、全員より重任の内諾をいただきました。